胡適
「イプセン主義」解説

胡適（Hu Shi こ・てき[1]）は、中国の著名な学者・思想家・著述家である。1891 年 12 月 17 日江蘇省川沙県（現、上海市）に生まれた。本籍は安徽省績溪県上荘村。1910 年アメリカに留学し、まずコーネル大学で農業を学ぶ。まもなく同大学文系に転部し、ついでコロンビア大学でデューイを指導教授として哲学を学んだ。アメリカ留学中の 1917 年 1 月『新青年』二巻五期に「文学改良芻議」を発表、口語文を提唱し新文化運動の口火を切った。1917 年夏に帰国し、北京大学教授となる。引き続き『新青年』を拠点に次々と重要論文を発表し、新文化運動の代表的人物となる。

その後『新青年』がマルクス主義の影響を受けて左傾化するとそこから離れ、自由主義の立場に立って引き続き数多くの学術論文、評論を発表する。その範囲は、文学・思想・歴史の各分野に及んでいる。1938 年から 1942 年まで中華民国駐アメリカ大使を務める。その後も北京大学校長などの任に着くが、中華人民共和国成立にあたってはまずアメリカに移りプリンストン大学に勤務し、1957 年からは台湾に移り中央研究院院長などの職に就く。1962 年 2 月 24 日心臓病で逝去した。

この間、中国では 1954 年より毛沢東の呼びかけで胡適批判が展開された。批判論文を集めた『胡適思想批判：論文匯編』第一集～第八集（三聯書店　1955～1956）が刊行されるなど、中国国内で胡適は極めて否定的に扱われた。しかし、中国が改革開放政策をとった 1980 年代以降は胡適再評価が進み、今日では新文化運動に果たした胡適の役割などが高く評価されている。

「イプセン主義」（易卜生主義）は、胡適が『新青年』第四巻六期（1918 年 6 月）イプセン特集号（易卜生専号）に発表した評論である。その目次は、以下の通りである。（　）は『新青年』の原文、［　］は筆者が補った中国語題名である。

イプセン主義［易卜生主義］……胡適
ノーラ［娜拉］（A Doll's House）
　第一幕……羅家倫
　第二幕……羅家倫
　第三幕……胡適
人民の敵［国民之敵］（An Enemy of the People）
……陶孟和
小さなエヨルフ［小愛友夫］（Little Eyolf）
……呉弱男
イプセン伝［易卜生伝］……袁振英

この特集は西洋演劇の紹介としても画期的なものであった。西洋近代劇やその劇作家を体系的・集中的に紹介したのは、このイプセン特集が最初であった。この特集は、それ以後の中国における近代劇紹介の口火を切ったものとなったのである。

このイプセン特集で、イプセン戯曲の翻訳紹介以上に大きな意味をもったのが、胡適「イプセン主義」であった。「イプセン主義」は、作品内容にまで踏み込んだ中国最初のまとまったイプセン論でもあり、これ以後の中国でのイプセン理解に大きな影響を与えた。

胡適が最も強調したのは、「社会の最大の罪悪は、個の個性を破壊し、それを自由に発展させないことにまさるものはない」ということであった。「文学改良芻議」以後、もっぱら文学形式を語ってきた胡適は、「イプセン主義」に至って初めて、個性解放の必要とそれを押しつぶす中国社会の現状の暴露を、あるべき新しい中国文学の内容として積極的に述べた。

今日からみるなら、胡適の主張は、個人の自我の発展がそのまま社会全体の発展につながるというかなり楽天的なものであった。また、この論文をイプセン論としてみるなら、胡適の分析が個々の作品の正しい解説に成り得ているかどうかも検討の余地がある。「イプセン主義」は、『ペール・ギュント』など前期作品についてはほとんど無視しているうえ、『人形の家』を中心とした中期作品と『野鴨』以降の後期作品との違いにもほとんど触れていない。全体として、胡適は『人形の家』など中期作品の観点をイプセンの全作品に当てはめて自己の論理を組み立てている。『イプセン主義』の中のイプセンは、社会問題を積極的にとりあげ闘う作家であった。

しかし、これは現在の時点での判断である。発表当時、「イプセン主義」の読者は、そこに初めて中国社会を根本的に批判する方法を見つけだすことができたので

1）中国の固有名詞は漢音で読むという原則に従えば「こ・せき」だが、今日では「こ・てき」という慣用音が定着している。

ある。そこには、清末演劇改良論のように現代を批判する鍵を古代に求めるという倒錯した発想はもはやない。また、封建制を批判しつつ、富国強兵を実現するためにそれと矛盾しない封建的要素を肯定するという背理もない。「イプセン主義」の論理は、中国の過去と現在に対する全面的な否定を可能にするものであった。この論理は1919年5月4日に起きた五四運動の重要な思想的準備となった。

訳出にあたって、『新青年』初出テキストを底本とした。胡適自選集である『胡適文存』（1921年）収録テキストとは、訳注で示したように一部に相違がある。

（瀬戸宏）